

読む得! 在宅医療と介護の連携

～身近な事例から～ 第18回

多職種連携で支える在宅生活

～障害福祉サービス・訪問看護に支えられ、在宅生活がかなったケース～

Aさんは一人暮らしの50代男性で、20代の頃に事故で両手足に重度のまひを患いました。両親や兄弟とは疎遠で、これまで何とか友人を頼りながら生活してきました。徐々にまひ症状が重くなり、日常の基本的な動作は全て介助が必要な状態になりました。



褥瘡や排せつじょくそつの医療ケアに加え、自律神経の不調による体調の変化や感染症・肺炎のリスクがあり、毎日のケアが欠かせません。

そこで担当の相談支援専門員と訪問看護師が連携し、複数の障害福祉サービスや訪問看護ステーションの利用を始めました。しかしサービスや支援方法が本人のイメージと合わず、ストレスから介護者に対して強く当たることもありました。その度に根気強く多職種チームで話し合いを重ね、関わり方を工夫することで、Aさんも少しずつ精神的に安定し、長年住み慣れた自宅で生活できています。

☆ポイント☆ 障害や頼れる親族の有無に関わらず、望ましい在宅生活に向けて多職種による支援を受けられる可能性があります。障害福祉サービスの利用は、病院の相談員や市の障害福祉支援課・障害者まちかど相談室に、訪問看護の利用はかかりつけ医にご相談ください。